

家族看護の現場からの発信 ―実践と課題―

久留米大学医学部

(座長) 益守かづき

東京慈恵会医科大学

(座長) 児玉久仁子

家族の誰かが病気に罹患し療養を強いられるようになったとき、病気を抱える患者の看病が初めてという家族、介護する過程で家族の絆を改めて捉え直した家族、自分の生活を調整することを強いられた家族など、家族は様々な体験に直面している。家族らしく病気を抱える方と共に生活するためには、どのような支援が必要であるかを探求するために、4名のシンポジストの方より家族へのかかわりや直面している問題、問題解決への取り組みなどをご提示いただき、参加者の皆さまとともに家族看護の実践と課題について理解を深めた。

現在循環器内科・心臓血管外科・腎透析の混合病棟で家族支援専門看護師として活動されている大島昌子氏からは、意思決定支援、ACP (Advance Care Planning) 導入時のケアおよび対応が難しい事例などについて語っていただいた。直接かかわった事例や相談事例などを提示していただき、家族をどのように捉え、どのようにかかわっているのかなど工夫されている点なども語っていただいた。

精神科病棟での看護実践に携わり、現在は大学で学部教育に携わる一方、定期的に臨床看護の場で活動されている畠山卓也氏からは、精神看護領域における家族の特性、家族の一員が健康問題に直面した時に家族らしく生活するとはどのようなことか、どのようにかかわることが求められているのかなど事例を交えながら、大変わかりやすく語っていただいた。

子どもに特化した訪問看護ステーションを開設し、病気や障がいのある子どもの訪問看護に従事している山下郁代氏からは、医療依存度の高い子どもの事例へのかかわりを中心に語っていただいた。現場の写真も提示していただき、楽しく生活することやきょうだい児も含めた家族の現状や、家族からの声を具体的に語っていただいた。

竹熊千晶氏には、医療依存度が高く家族だけの介護では崩壊しかねない家族などの事例を通して、患者も家族も安心して最期まで過ごすための「ホームホスピスわれもこう」の活動を報告していただいた。施設内の写真も提示していただき、地域で看取ることの意味、家族や地域の力を緩やかに紡いでいく意味を考えさせられた。

ディスカッションでは、会場にご参加の方より、施設と地域との連携についての質問があった。小児看護領域のように家族がすぐそばにいない場合も多く、それぞれの現場での取り組みより領域によって相違はあるが、施設と地域の情報共有だけではなく、家族との連携の重要性について意見交換された。

最後に、今回のシンポジウムの企画に賛同し、コロナ禍で多忙の時期にも関わらず、福岡の会場まで来ていただいた4名のシンポジストの皆さま、ご参加いただいた皆さまに改めて感謝申し上げます。